

視察報告書

報告者氏名 矢口 輝美

1 視察期日 令和6年5月23日（木）

2 視 察 地

（1）社会福祉法人 多摩養育園 光明第四こども園（八王子市横川町603）

（2）八王子市役所

3 調査事項

（1）医療的ケア児の受け入れについて

（2）幼小接続を見通した教育課程の編成・実施の実践について

①乳幼児すくすくてくてくガイドラインについて

②保・幼・小連携の日の実施要項と効果について

（調査目的）令和元年の文部科学省幼児教育実態調査では、全国では約6割の市町村で、幼小接続を見通した教育課程の編成・実施が行われていないとあるが、この13年で90園もの民営の保育園が増えた流山市においても接続における課題がある。保育園や幼稚園、学校教育の管轄が分かれていることも連携上の課題がある。そこで貴自治体の計画と実践例について調査するため。

4 所感等

（1）医療的ケア児の受け入れについて

昭和38年に開園された保育園、平成29年に一号認定（子どもの年齢が満3歳以上、保育に必要な事由に該当しない、教育標準時間4時間程度で通園）を預かるようになり、令和3年度から医療的ケア児の受け入れをスタートした。医療的ケア児の受け入れについては、令和2年度に市役所とやり取りし準備をした。現場は受け入れに際し、面談、情報共有、職員間の確認検討を繰り返し、対象児の受け入れスタート。今年度は酸素ボンベを必要とする幼児と、車いすを必要とする幼児2名を受け入れ。受け入れの際にどのような事を気を付けているのか、事例ベースでお話いただき、その後実際に園での様子を参観した。医療的ケア児2名とも、周りの子ども達と一緒に活動していた。「保育士も不安だったが、医療的ケア児を受け入れる事で、子ども達が自然と助け合えるようになった。子どもは子ども同士で学び合うことがわかった。」という言葉が印象的だった。特に車いすを必要とする幼児は、乳児の頃から受け入れを開始、「自分に出来る事は自分で」と、身辺自立を目標に取り組んできたが、まわりのお

友だちからの刺激が大きいことで、他の子と同じ活動をしたいという意欲が芽生え、乳児の頃は保育者との関わりや援助を好んでいたが、幼児になって活動の幅も広がったとのこと。周りの子ども達も、「お友だち」として遊んでいるとの事だった。

（２）幼小接続を見通した教育課程の編成・実施の実践について

小学校 69 校＋義務教育学校 1 校＝計 70 校 第一学年 3800 名（令和 6 年度）

保育園・幼稚園合わせて 216 園

多くの保育園から、小学校に進学するのは流山と同じ状況。

○ガイドラインの共有と、就学支援シートの活用について

ガイドライン策定後、市の職員が全ての園を周り説明し、幼保アドバイザー 3 名が、保育観察をし、カンファレンスを開催する事を繰り返した。保幼小子育て協議会で意見交換をし、保育園協会、幼稚園協会で国の動きを共有し、研修を実施、共通理解を図っている。課題として、施設数が多いため、支援策を考えるのが難しい事が挙げられた。幼保小で、ガイドラインについて研修を実施。今後は中学でも研修を実施予定。家庭の想いを受け取るために、就学支援シートを保護者全員に記入してもらっている。

○市長部局と教育委員会の連携について

定期的に意見交換をする事で連携を図っている。架け橋プログラムについての相互理解が出来ており、「幼稚園保育園で遊んできた事が、こうやって学びに繋がるんだよ。」という事が双方で理解されていた。今後は令和版のスタートカリキュラムを作成予定とのこと。

流山市でも、全保育園で障害児の受け入れをスタートし、今後は全幼稚園での受け入れもスタートするという事だったが、支援が必要な子ども達をどのように受け入れていくのかを具体的にイメージ出来なかった。実際に医療的ケア児を受け入れている園の取り組みは大変参考になった。支援と自立は相反する部分もあり、自分でやってみたいという気持ちをどのように育てていくのかが大事なのだと改めて理解した。

八王子では、自然な形で市長部局と教育委員会が連携が出来ていた。大人の事情ではなく、一人一人の子どもに寄り添った形の支援が出来ることが一番大切だと思う。流山市でも、良い形で取り組んでいけるように考えたい。